

石川県白山自然保護センター編集

いはくさん

第11巻 第1号



ブナ林と集落

白山では数多くの生きものがブナ林の恩恵を受けていますが、人間もその例外ではありません。人間の居住地域兼生産活動の場となっている集落は、白山麓では通例、手取川本・支流沿いの河岸段丘上の狭い平坦地に立地し、また、その背後には山地斜面が迫っています。多雪地である白山麓では、こうした場合に雪崩や山崩れ等が心配されますが、集落の裏山にブナ林が残されていることにより住民が災害から守られています。白山麓の集落の背後にブナ林が多いのはこのためです。

写真は鳥越村仏師ヶ野地区の背後のブナ林で、ブナ林の防災機能が見られる典型的な集落です。白山麓ではこの他に、吉野谷村瀬波、同中宮、尾口村東荒谷、同鴉ヶ谷（現在はダムで水没）といった集落の裏山にブナ林が見られます。

ブナを始めとする落葉広葉樹の伐採が全国的に進められていますが、できる限り残しておきたいものです。

（岩田憲二）

自然保護雑感

岩田 憲二

自然と人間の隔絶

自然環境を考える場合に頭に入れておかねばならないことは、“人間も自然界を構成する一員であり、他の生き物とのバランスのうえに生活してきた”という生態学的事実です。例えば、人間の諸活動により大気、河川、土壌が汚染すると、そこに生息する生き物が影響を受け、それが人間にはね返ることがあります。また、大規模な森林の皆伐は、各種災害の直接・間接の要因となり、人間が被害を受けることがあります。こうした公害・災害の発生は、いずれも自然の自浄力や復元力の許容限度を超えた行為が原因です。

明治以来、ひたすら経済効率と合理性を追求して国づくりに励んできた結果、かつて欧米の人達に絶賛された日本の自然は、今では“秘境”と呼ばれる地域でしか見られなくなりました。特に、高度経済成長が本格化したここ20年余りの間の自然の様がわりは激しく、かつて身近に見られた生き物の多くは今では私達のまわりから姿を消してしまいました。今日、自然保護への関心が高まり、自然教育活動が盛んになった背景には、以上に述べた自然と人間の隔絶があると考えられます。

自然保護に対する認識

自然と人間の隔絶は、その認識度により個人差がありますが、一般に大都市になるほど、或いは、産業が高次化するほど大きくなるといえます。第一次産業中心の農山漁村と、第二次・三次産業中心の都市では、元来自然に対する考え方、接し方が違っていました。自然の恵みの中から産物を得、生計を立てると共に、自然の厳しさ、恐さも充分知っている村落部と、生産物の供給を他者に頼り、人工施設により自然から切り離されている都市部では、自然保護に対する認識や対応が異なりま

す。自然との共存が不可欠な村落部の生活と、自然環境の悪化と一体となった都市部の生活というのが、明治以来の都市化・工業化の進展の中での住環境のパターンでした。ですから、意識するしないにかかわらず、村落部では自然が大切に守られ、都市では自然を省みることが少ないという状態が続いてきました。

ところが、高度成長が本格化したここ20年来、こうしたパターンが崩れ始めました。高度成長期の都市部への人口流出による過疎化、及び、第一次産業の不振は、村落部の従来の産業構造に変化を与えました。すなわち、過疎化の打破を目的として、村落部でも開発事業が盛んになり、かつての農林業従事者が労働要員として吸収されてしまいました。こうして、自然に根ざした農林業から、自然開発の主体となる建設業や観光業への転換が進みました。村落住民は好むと好まざるにかかわらず、開発行為に関与せざるをえなくなったわけです。その一方で、1970年代になってようやく自然保護に対する一般の認識が高まり、特に環境問題で悩む都市部で顕著になりました。自然保護論者は当然のことながら村落部での開発行為にも言及し、その是非をめぐって激しい自然保護論が起こったわけです。

今日の自然保護論争の根本的原因の一つは、以上に述べた都市と村落の社会的相違にあると考えられます。従来の自然保護論者は概ね都市居住者であり、自らの知的活動、学術活動、或いは余暇活動の一環として自然保護に携っている場合が多く、自然保護に関する十分な理論武装と都市住民の支持を背景に、自然資源の保護が主張されます。その主張は生態学的見地からも妥当なものであり、論争に無関係の第三者も納得させる理論的根拠も

しっかりしています。しかしながらこうした自然保護論には、その対象地となる村落社会、及び、住民生活について、あまり注意が払われていないという欠陥があります。地元の村がなぜ過疎で悩まなければならないか、なぜ開発行為に頼らなければならないか、という側面にもスポットをあてるべきです。人間の生活から遊離した自然保護論はありえないからです。

それでは、一体どのような自然保護論が好ましいのでしょうか。筆者は、その内容よりも提唱者について、もっと考慮されるべきだと思います。自然保護の提唱者や従事者には、その居住地と産業活動の場と、自然保護の対象地が一体化した人達こそふさわしいと思います。例えば、山村に住み、働き、山の自然を守ることに熱意のある人達は、その土地の自然保護運動の提唱者として典型的な例といえます。そうなれば、現地の実情に即した自然保護運動が展開されることでしょう。

自然とのふれあい

これまで、過疎村落での自然保護論、同運動について述べてきました。それでは、自然保護に配慮をしつつ過疎対策を講じる——つまり開発を行なう——方策はあるのでしょうか。ここでは、山村を例に考えてみたいと思います。

山村の特長は、何といたっても豊かな自然資源（森林や河川）で、かつては地元の人達の生活の源泉となっていました。例えば、薪炭材、林産物、有用動植物等が森林や河川から得られました。今日でも、山村地域の森林・河川は大切な水源函養兼供給機能を持っており、下流平野部は大きな恩恵を受けています。そして、実際に上流域の森林・河川の維持管理従事者の多くは地元山村の人達です。ですから、山村の過疎化が進むと森や川の管理人が少なくなるおそれが生じ、非常に困るわけです。こうした理由からも、活気のある山村が望まれ、過疎対策が必要となります。そのためには、自然を活用した開発が一つの方

策として考えられます。

具体的には、自然とのふれあいの場として山村の森や川を活用することがあります。年少者には、自然の中で生息する動植物の姿を通して、彼らの生存基盤が水、土、光といった自然の諸要素にあり、決して人工手段によるものではないことを理解してほしいものです。そのような意図と企画が実施できるような自然教育施設が日本各地の山村で、少しでも多く設置されたいものであり、それは今後の時代の要請に適合したものだと思います。

また大人に対するものとしては、一時滞在型の保健休養施設が山村に向いていると思います。山村の自然は精神的な解放感を求める人には最適と言えます。近年、「森林浴」の効用が叫ばれていますが、筆者の経験でも森の中を歩き、森の霊気・香気を浴びると、確かに心身ともにすっきりします。特に、春先から秋にかけてのブナ原生林には、その効果があるように思えます。都会からの一時脱出、ストレス解消、気分転換等を求める人のために、保健休養施設の充実が望まれます。現在、色々な施設が山村に既にありますから、各地域の特色を生かしたユニークな施設がよいと思います。白山麓では、かつての出作り地（cf. P10）をうまく活用して、出作り小屋を復活させ、そこを休養施設にするといった案が考えられます。かつての出作り生活では、山の住人が夏・冬別々の家屋で生活したわけですが、今後は、都市生活者が週末、あるいは月に1回だけでも、山村に一時滞在してほしいものです。財政面や運営面で難しい点もあるとは思いますが、要は、多数の人が観光目的でなく休養等の一時滞在を目的として、山村に来ることが、今後は望まれます。そうすれば、自然環境だけでなく村の生活を含めた総合的な立場から、自然保護を考え、理解することになるでしょう。

（研究普及課）

ブナ林の自然観察

～春から初夏にかけて～

上馬康生

みなさんはブナという木を知っていますか。白っぽい木はだが目立ち、大きなものでは高さ30m、直径150cmにもなる木で、早春の山の中で他に先がけて新緑の林となります。日本の温帯の森林を代表する木で、全国の山地で大きな林をつくっていましたが、最近伐採が進み、今では北日本の主に日本海側の山の奥地に行かなければ、その原生林を見ることはできなくなりました。

白山では、広大な原生林が標高1000m～1600mの範囲に数か所残っています。この林は白山を代表する大型ほ乳類であるツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザルなどのすみかとなっているばかりか、四季折々のたくさんの鳥や昆虫、草花などの生活の場所でもあります。

それでは、ブナ林の春から初夏にかけての自然についてみていくことにしましょう。

早春の花

深い雪に覆われていた山々も、4月にはいと急速に雪溶けが進み、ブナ林でも大木の

根元のまわりの雪がなくなり、ぽっかりと穴があいて地面が見えるようになります。そのようなところにピンクの花を咲かせるイワウチワがたくさん群生しています。林の中で、いち早く咲き始める植物の一つです。やがて雪溶けとともに植物は次々と芽吹き、花を咲かせます。主な花の咲く時期を表にあげておきました。これはあくまでもめやすで、年により、また標高のちがいで、かなりのずれが生じます。このような花の中で、カタクリやキクザキイチリンソウなどは、林床でいっせいに花をつけ、ある時期一面のお花畑となります。ブナが葉を広げると、日光が林床へはとどきにくくなります。そのため、これらの植物は、雪溶けから木々が葉を広げるまでのわずかの期間に、いっせいに花をつけたり栄養を貯えなければならないのです。

林床の花が終わる頃になると、ブナは芽吹き、黄色の花をつけます。ブナは毎年花を咲かせるとは限らず、5年前後の周期でいっせいに咲きます。そのため、花が咲く年には、花のみならず、そこに集まる昆虫や鳥なども観察のよい対象となります。尾添川周辺ではニホンザルが群れてブナに登り、花をむさぼり食うのを見ることがもできます。

鳥の生活場所

冬の間、ブナ林周辺ではシジュウカラ、コガラなどのカラ類やキツツキ類などの一部の鳥が生活しているだけです。しかし3月になると、暖かい日にはこれらの鳥の中にもさえずり始めるものが出てきます。やがて低地や南方で冬を越していた鳥たちが、次々とどってきて、盛んにさえずり始めます。植物とちがって翼のある鳥は、どこへでも飛んでいきそうですが、それでもふだん生活するところは決まっていて、それぞれの種類ですみ分け合っているのです。それで目的の鳥を

ブナ林周辺の主な植物の花期（白山山麓）

種 類	3月	4月	5月	6月
マルバマンサク (タムシバ)	—	—		
木 オオカメノキ		—	—	
ブナ		—	—	
本 サイゴクミツバツツジ			—	
(ウワミズザクラ)			—	
ケナシヤブデマリ			—	
ムラサキヤシオ			—	
イワウチワ (キクザキイチリンソウ)		—	—	
草 カタクリ		—	—	
スミレサイシン		—	—	
本 ニリンソウ		—	—	
(イワカガミ)			—	
マイズルソウ			—	
シライトソウ			—	

さがすためには、その場所へ行かなければなりません。

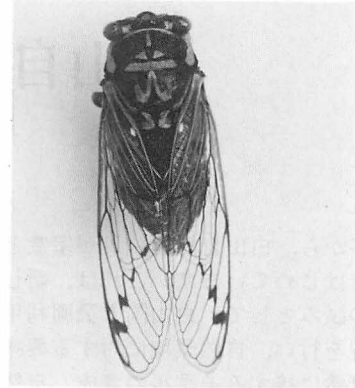
ブナ林といえども、ブナの大木だけでなく、倒木の跡に低木林ができたり、沢の流れているところがあったり、谷すじに高茎草原が広がるなど環境は様々です。鳥はこれらの環境の中で、それぞれに適した場所にすみついています。大きな川にはカワガラスやキセキレイなどが、また沢沿いの繁みにはミソサザイやコマドリが、高茎草原にはホオジロがいます。そして谷に面した木の枝先ではオオルリがよくさえずっています。同じ低木林でも、高木層のない明るい林にはウグイスが、また林縁や明るいブナ林の低木層にはコルリが、亜高山帯近くの林にはクロジがいるといった具合です。次に一本のブナについてみた場合も、上層の太い枝にはゴジュウカラが、太い幹にはアオゲラが、中層から下層にはシジュウカラがいるといった具合になっています。

オトシブミと虫こぶ

林の中の道を歩いていると、地上に、葉を1cm くらいの筒状に巻いたものがよく落ちているのに気づきます。これはゴマダラオトシブミなどオトシブミ類の成虫が、葉に卵を産みつけ、これを巻いて落としましたものです。その様子が、昔、公然とは言えないことを書いて、道などに落としておいた文書（落とし文）に似ているところから、この名前がついたのです。卵からかえった幼虫は、その葉を食べて成長します。地上に落ちずに、木の



オトシブミ



コエゾセミ

で葉についてぶらさがっていることもあり、それがゆれ動く様からオトシブミの「ゆりかご」と呼ばれることもあります。また注意して観察すると、木の葉や茎の一部が球状に変形した虫こぶと呼ばれるものがたくさん見つかります。これはタマバエ・タマバチ類が卵を産みつけたため、本来は葉などになるはずのところを変形したものです。その中でも卵からかえった幼虫が、それを食べながら成長しているのです。これらオトシブミ類やタマバエ・タマバチ類は、それぞれの種類によって利用する植物が決まっています。

ブナ林のセミ

鳥がよくさえずるのは、ブナ林では4～5月頃で、6月になると少しずつ少なくなり、特に日中はごく少数しか鳴かなくなります。そのころから、鳥にかわって盛んに鳴き始めるのがエゾハルゼミです。天気の良い日中に一びきが「ヨーギ、ヨーギ、ヨーギィ……」と鳴きはじめると、次から次へと周辺のセミも鳴き出し、林中がセミの声に包まれるほどになります。このセミも7月中頃になると、しだいに数が少なくなり、今度は「ギィ……」と単調に鳴き続けるコエゾセミが現われ、ブナ林は盛夏をむかえるのです。

白山の登山コースではチブリ尾根や釈迦新道、平瀬道、中宮道などがブナの原生林の中を登っています。これらのコースを利用して、残り少なくなったブナ林の自然をじっくり味わってみるのも、またちがった登山の楽しみ方となることと思います。（研究普及課）

白山自然解説員の活動

美馬秀夫

昨年から、白山自然解説員が室堂と中宮で活動をはじめています。これは、新しい自然教育の試みとして、白山国立公園利用者に自然解説を行い、自然環境に対する興味を刺激し、自然に接するモラルの育成、自然保護思想の普及啓もうを推進しようとして実施したものです。国立公園が果たすべき、自然教育の場としての重要な使命を、より一層有効、適確に展開し、利用者の期待にこたえていこうとする制度です。

自然解説員の誕生

自然解説員が誕生したのは昭和57年5月です。県では一般から受講者を公募して、自然解説員養成講座を実施しました。この講座は、解説員として認定するにあたって受講を義務づけているもので、白山の自然についてそれぞれ専門の先生方からの講義と、野外での自然解説実習とから成っています。新聞、テレビ等の協力を得て受講者を募集したところ、定員の2倍を超える100名近い応募がありました。会場の都合等により、48名に受講していただきました。

3日間にわたって行った講座を修了した、42名が自然解説員として認定されましたが、職業は教員、会社員、自営業などさまざまで、女性2名を含み、年齢も23才から66才と幅広く、さらに、これまでの自然保護活動歴や、自然環境に関する知識や得意な分野もさまざま



白山山頂での自然解説

ちです。ただ、自然保護への関心と自然解説への意欲を十分持つ人々が組織されたといえるでしょう。

自然解説員の活動

今年度の活動計画を表にして示しましたが、室堂と中宮地区で延104名が活動することになっています。

室堂地区では、夏山の最盛期を中心に3泊4日の日程で11交替で活動します。御来光のあとの山頂池めぐりコースの案内と、室堂平お花畑園路での高山植物を中心とした解説が主なものです。これらの活動は時間を決めて実施するもので、ポスターの掲示、放送での呼びかけなどで参加者を集めて行います。その他、予約を受けて行うものや、グループを対象として随時行うものなどさまざまな活動があります。夜にスライドを上映しながらのレクチャーについても実施したいと考えています。

中宮地区では、夏休み中の毎日と、春、秋の休日に、延60名が活動します。白山自然保護センターの自然観察園、野猿公園が主な活動場所です。自然保護センターを訪れたグループ、団体等を対象として随時解説を行います。ここでは、特にニホンザルについての十分な知識が要求されることとなります。白山スーパー林道での解説活動についても工夫していきたいと考えています。

昭和57年度にも、ほぼ同様な活動を行い、登山者、利用者に喜ばれましたが、解説対象者は、室堂地区で延約2000名、中宮地区で約2500名に達しました。

実際の解説にあたっては、むずかしいことばかりですが基本的なねらいとして、次のような点に留意することとしています。

- i) 自然への興味を刺激し、もっと知りたいという意欲をわかせる。
- ii) 貴重な自然の地或にいることを気づかせる。
- iii) 国立公園の体系、目的を理解させ、楽

しみ方について助言する。

- iv) 自然と人間とのかわりについて考える契機を与える。
- v) 原生的自然を通じて郷土に対する愛着を深めさせる。
- vi) 利用者の反応を吸収し、解説員も勉強していく柔軟な構造とする。

新しい展開

今年2年目を迎えようとする自然解説員ですが、実践の中から反省点や新たな工夫をひきだして、より有効で利用者にも親しまれる制度として柔軟に運用していきたいと考えています。いくつかの新しい動きもでてきています。

一つは、つい先日発足した石川県自然解説員研究会です。これは、自然解説員の自主的な組織で、解説員相互の研さんを深めていこうとするものです。また、解説員各人がそれぞれの地元や職域などでもリーダーとして自

58年度 活動計画

活動場所	期 間	活動体制	延人数	主な活動場所
室堂	7月15日～ 8月17日 (34日間)	1人 3泊4日 11交替	44人	山頂池めぐり コース室堂と その周辺
中宮	7月23日～ 8月21日までの 毎日と5月 22日～11月3 日の日・祝日 30日+23日= 53日	1人(2 人*) 日帰り *ただし、 ピーク時 は2人ず つ	60人	白山自然保護 センターと自 然観察園、白 山スーパー林 道と三方岩岳
2地区			104人	

主的な解説活動を行いだしています。更に、室堂や中宮地区での季節毎の自然のたよりや、解説資料づくりも企画されています。

室堂や中宮で白山自然解説員に出会ったら、気軽に声をかけてみて下さい。解説員と一っしょに白山の自然により深く接して下さい。また、本制度に関して、皆様のご指導、ご批判をお願いします。

(県自然保護課)

石川県自然解説員設置要綱

第1 設 置

県民の自然に対する理解と愛情を深め、自然環境の保全に関する意識の高揚を図るため、県に石川県自然解説員（以下「自然解説員」という。）を置く。

第2 業 務

自然解説員は、自然公園等の利用者を対象に、別に定める要領にしたがい次の業務を行う。

- (1) 自然への理解を深めるための解説に関すること。
- (2) 自然環境の保全に関する知識の普及及び思想の高揚に関すること。

第3 委 嘱

自然解説員は、自然環境とその保全に関し、知識を有する者であって、次の要件を満たす者のうちから知事が委嘱する。

- (1) 石川県が実施した自然解説員養成講座を終了した者
- (2) 県内に居住する18才以上の健康な者

第4 解 嘱

自然解説員が次のいずれかに該当する場合は、知事は、これを解嘱するものとする。

- (1) 自然環境保全の目的に反する行為、その他自然解説員としての体面を汚す行為を行ったとき。
- (2) 本人からの申し出があったとき。

第5 報 酬

自然解説員が、その業務を行ったときは、別に定めるところにより報酬を支給する。

附 則

この要綱は、昭和57年4月6日から施行する。

冬眠グマ調査行

野崎英吉

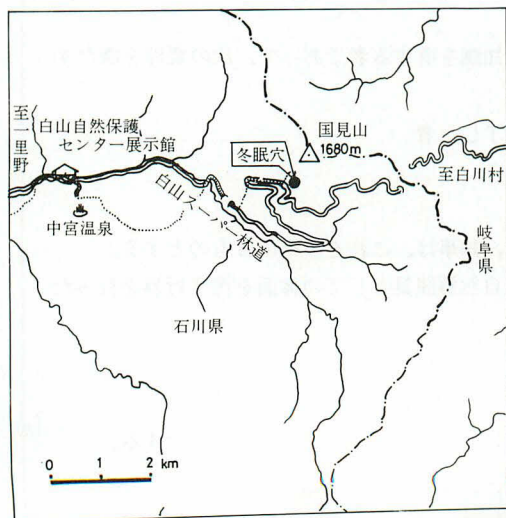
1983年3月26日、私達は白山山系蛇谷溪谷水法沢に冬眠中のツキノワグマを捜し求めていた。このグマは、1982年8月初めに補獲され、首に発信機がとりつけられ追跡されていたものである。

調査の目的

冬眠グマ調査の目的は、冬眠穴の場所がそれまでの5ヶ月間に行動していた地域のどこに位置するか、冬眠直前のグマの活動場所との位置関係はどうか、さらに実際にどんな穴で冬眠しているか明らかにすることであった。また、発信機の電池の寿命は1年間しかもたないのので新しい電池に取り換えることによって次の冬眠まで追跡ができるようになる。さらに捕獲時の8月2日には体重18.3kgの子グマであったが、冬眠までには体重は倍近くに増え、そのままの首輪をつけておくと首が締めすぎる事が予想され、そのためどうしても首輪はとり換えなければならなかった。

越冬地へ向かう

午前5時半起床。吉野谷村市原の冬期事務所を出発して3日目の朝。前夜はいつ落ちてくるかわからない雪崩を避けるため、白山



クマ調査地

スーパー林道の第1号隧道にテントを張り、一夜を明かした。天気は快晴、午前7時出発。調査の一行は、吉野谷村中宮の大工でクマ狩りの達人、雪の急斜面を飛ぶような身の軽さでかけめぐるクマを追う山岸さん、センター技師で中宮の山を知り抜いている茨木さん、調査機材や装備の荷上げをお願いした金沢大学山岳部の髙田君、以前からクマの姿を求めて白山に足を運んでいる北国新聞のカメラマンの高桑さん、それに私の計5名であった。

午前8時、山腹を直登し、第2ヘアピン駐車場に着く。私達の向かう谷には高さ20mもの滝がかかっているが、その滝もなだれの雪で埋まっていた。この滝の上の尾根で、昨年11月と12月に追跡中のクマを3度見ていた。この尾根はブナとヒメコマツ、ヒノキの林になっていて国見山まで続いている。昨年この尾根でクマを見たとき、すっかり葉を落したブナ林の中で、落葉を前足でかき分け、枯葉に埋もれたブナの実を拾っていた。また、12月には30~40cmの雪の中を、前あしで雪を崩しては地表の木の実を捜していた。その尾根まではスーパー林道から直線距離にして約500m、しかし、夏には連続する滝と岩壁で人を寄せつけない。その尾根へたどりついたのは午前9時すぎであった。途中何度も受信機をとり出し受信を試みたが、クマからの電波は全く入らず、尾根に到着直後も同じであった。荷物を下ろし、それぞれ冬眠穴とおぼしきところを捜し始めた。

追跡中のクマがこの尾根付近に冬眠していると判断したのは次の理由であった。冬眠前の昨年12月、7日から25日まで電波による方向探知からこの尾根にずっといたことがわかっており、追跡を中断した12月25日以降は降雪のため雪中での採食は無理であり、また、1m以上の新雪で長距離の移動はむずかしいと考えられたからであった。

尾根で探索を始めて10分程経過したとき、受信機へ、ピッ、ピッ、ピッと受信音が入ってきた。やはりこの近くに冬眠していた。近



木の穴から顔を出したクマ

くの岩の割れ目や雪原の中にポッカリ口を開けた木の根元など、それらしいと思われるところにアンテナを持ってゆき中をのぞいてみた。同じ所を何度も捜したが、これといった決め手が見つからない。2時間あまりその尾根の冬眠穴とおぼしきところはすべて捜した。午前11時30分、まずは捜索を中断し、昼食にした。

冬眠穴発見

さきほどから電波の方向をみるとどうもこの尾根ではなく、谷をへだてた南側からやってきているようだった。谷の中で電波が反射するためはっきりした方向はわからなかったが、どうもその方向が怪しい。山岸さんは、それまで私が持っていた受信機とアンテナを持って谷の方へずんずん下りていった。途中、立止ってはアンテナを回し、またずんずんと進んでゆき、間もなくむこうの尾根にたどりついた。幹の途中に大きな穴があいている木や斜面にななめにつき出した大木によじ登ったかと思うと次にはその下の木の根元に冬眠穴がないか捜していた。そのうち、針葉樹の木立の向う側に入って見えなくなった。間もなくこちら側からよく見える斜面に山岸さんはとびだしてきた。彼の身振りはクマを発見したという合図であった。

あわただしく荷物をザックにしまい込むと一目散にザクザクになりだした雪の斜面をうもれながら駆け出した。現場につくと山岸さんは「穴の中で黒いもんが、動いとるやろ」と1本の木を指さし私達に示した。40度近く

ある急斜面の尾根上にヒメコマツが一本立っていた。根元付近は風のためかほとんど雪がたまらず、根際から40cmぐらいのところから縦に細長いわれ目のような穴があいていた。その中ではっきりしないが黒いものが動いていた。

クマを穴から出す

まず雪の急斜面をけずって荷物をおろす棚をつくり、クマに麻酔をかける準備をした。クマはあたりの気配で目醒めたようだった。入口を木の枝でふさぎ、麻酔用の注射筒をボウガンにセットした。思うようにクマは腰やうでの筋肉の厚いところをこちらに向けてくれなかった。ねらいを定めているうち、クマはすばやく注射筒に手をかけはじき取ってしまった。同じ方法ではうまくいかないので、呼吸気系の麻酔薬を綿に浸みこませ棒の先にくくりつけ、穴の中に差し込むことにした。うまい具合に興奮気味のクマはその綿に喰いついた。くわえたまま息をするのでどんどん効き目があらわれた、苦しくなったクマは穴から顔を出しさらに手も出した。その手の甲に麻酔の注射をうった。5分もしないうちにクマの目はトロンとなりグッタリとした。完全に麻酔が効いたようだ。

効き目を見はからって、穴の中に手を入れクマをひっぱり出した。しかし、首まではどうにか外に出たが、それからは全く出ない。あとでその入口の大きさを測ってみると幅15cm長さは53cmであった。からだ全体をひっぱり出すのを断念し、首輪だけを交換することにした。危惧したとおり、首がずいぶん大きくなり首輪も廻らないほど締っていた。クマは一廻り大きくなり、40キロ程になっていた。久しぶりに見たその姿は8月に捕えたときの弱々しい姿からすっかり大きくなり、立派な「熊」というにふさわしい姿になっていた。

新しい首輪を少しゆるめにしてクマの首にとりつけ、もう一度その姿を写真に収めて私達はその場をあとにした。冬眠穴を発見して約1時間、時計は午後1時35分であった。

その後の調査で、クマは4月下旬には冬眠から醒め、再び活動を始めたことが確認された。
(研究普及課)

いわゆる「出作り耕作」への疑問

千葉 徳 爾

白峰・尾口村の住民生活を調べた石川県郷土資料館の報告『白山麓(1973)』を読むと、注意すべきことが載っています。この地方の山林を伐って火をつけて焼き、その跡にヒエ・アワ・マメなどの雑穀を栽培し、3～4年で地力が衰えてくると他の場所を焼いて耕地を移動させるナギハタ(焼畑)という耕作法は、現在ではほとんどみられません。昭和30年代まではまだ各所にみられ、明治時代の末ごろまでは、いま国有林となっているブナ林地帯をのぞいて白山麓全域にみられたものでした。つまりこの地域は全国でも有名な焼畑地帯だったのです。そしてそのような形の農業が盛んであった理由としてこれまでの意見では、この手取川の狭い谷底の集落(ジゲと呼ぶ)に住む人びとが人口の増加によって谷底の耕地が不足してきたために、しだいに山復の緩斜面を求めて山中でナギハタを作り、食糧生産をはじめようになった。つまり人口過剰による耕地の拡張として説明してきたわけです。この説明の裏づけとなったのは、この地方では夏は山中の耕地の近くに家建ててそこに一家が生活し、冬の積雪地には谷底のジゲに暮す「出作り」という季節的移動居住の形式が行われたことで、一時は中学・高校の地理の教科書や参考書にものせられた有名なものでした。

しかしながら、実はこの説明ではよく理解

できないことがいくつかあります。まず、「出作り」といいながら1年中その出作り地で生活し冬でもジゲにもどらない家族が、既に1863年ころ白峰で年中ジゲに居住する約100戸を除くと出作りの家約400戸のうち半数近い180戸にも及んでいたといっています。これを便宜上永久出作りと呼んでいますが、考えると出作りではなく年間定着しているわけですから、おかしな表現です。しかも『白山麓』の調査時点では白峰5戸のうち4戸が、知られる限り約200年前の祖先の代から代々山中に家をもちジゲに住んでいなかった家庭でした。同じころ尾口村方面を調べた佐々木高明氏も9戸調べたうち1戸だけがジゲから分れて山に入った季節出作りで、あとは祖先からずっと山住居だったことを述べています。だから佐々木氏は従来の人口増加による耕地拡張が出作り→焼畑耕作と発達したという説は再検討の余地があるといっています。そういわれてみるとこれまで歴史の教科書にのっている江戸時代後半の全国的に人口が増えなかったという時期に、白山麓の山の中だけがどんどん人口が増したというのも疑わしいことでした。

いま1つ、同じく尾口村の方での調査ではこの地域の焼畑耕作は、白峰の方からナギハタをひらきに来た人たちから技術を習って焼畑農耕をはじめたと伝えられていまし



ナギ畑 (小松市小原)



出作り小屋 (白峰村苛原)

た。これについては私も山間部でも地名の調査結果を通じて同様の推定をしています。ナギハタのあった土地の名をみると、白峰では誰々の耕作する山地という屋号や通称の人名のついたヤマという名称が極めて普通にみられます。ところが尾口・吉野谷方面ではナギハタのある箇所地名にはそのようなものはほとんどなく、一般の山地の地名のようにその土地の地形・地物・植生などによってつけられた名称です。また、ナギハタをするための山林の貸借期間は白峰では2～3代にわたって使用できる20～50年という長期であったのに、尾口・吉野谷方面では1～2度耕作をする5～10年という短期というちがいがみられます。つまり、ナギハタの技術でも経営方式でも両者の間にはっきりしたちがいがあって、同じく出作りといいながら白峰の土地利用の習慣には、いわゆる永久に近い山地居住の可能な素地があるのに、尾口・吉野谷方面にはそれがありません。

以上のことからみると、南の白峰方面でナギハタを行う人たちは、尾口・吉野谷などのようにもともと平地で水田や常畑の耕作だけを営んできた人びとが、人口がふえて来たので急に山中に入込んでナギハタをつくりはじめたとは考えにくいのではないのでしょうか。この地域の人びとはもともとナギハタによる雑穀に基礎をおいた生活技術とそれにふさわしい土地制度とを長いこともちつづけてきた文化を有すのではなかろうかと思うのです。

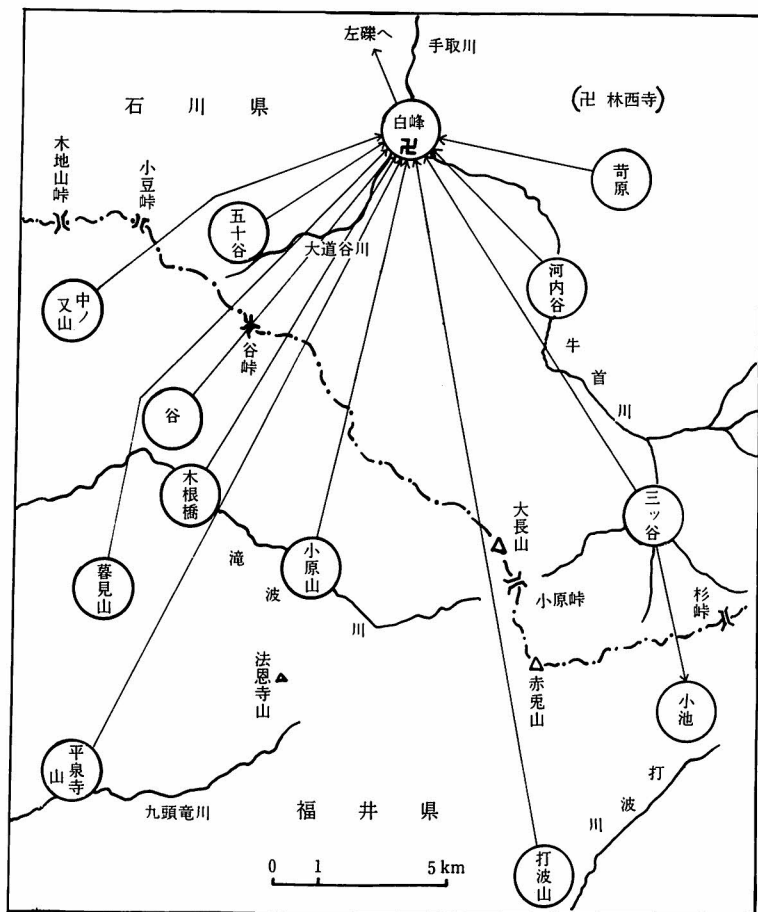
そのような推測をする資料の1つが、白峰林西寺の過去帳です。この寺は起源は泰澄と伝えられる古い寺ですが、過去帳は江戸時代末期の天保5（1834）年以後しかありません。しかし、それから明治5（1872）年までの間に記録された檀徒の中で、〇〇山あるいは現在永久出作り地であったことのはっきりしている土地に居住していた人の数を調べたのが第1表です。その居住地がほとんどすべて白峰より南、ことに分水嶺より南の福井県側の山間部に集まっていることは、第1図からよくわかるでしょう。つまり、林西寺檀徒が江戸時代の末ころ、現在より約150年前にはいわゆる永久出作りの家がかなり多く、またその福井県内の住民の割合が時代が下るほどしだいに北に多くなってくるのがうかがわれます。このことは、永久的出作りがしだいに

南の方から北の白山麓に移っていったことを意味するように思われます。ことに当時は7～8才以下の幼少の者は過去帳に記されない場合が多かったので、過去帳記載者はほぼ成人に限られ、その居住地は永久出作りであったとみてよいでしょう。また、雑穀食の人びとには80～90歳の老人が少なくありませんでしたから、この時期にこの地方の永久出作り地での死亡者にはおそらく1834年よりも約70～80年前から、つまり1750年代の宝暦・明和といった江戸時代中ごろからの居住者もかなり含まれていると推測できます。このことはその時代の山中の永久出作り地が、おもに白峰より南方にあったこと、つまり明治時代の末に白峰を中心に分布した出作り地は、南から北へと出作り地が移動していった結果を示すものではなかろうかということを示す材料といえましょう。ことに、過去帳の年代を2つに中央の嘉永以前と安政以後とに分けてみると、第1表でわかるように谷、平泉寺、暮見、小池、など分水界方の福井県側の死亡者が減少していること、逆に石川県側の手取川上流がしだいに人口が増してゆき、それに伴ってこの地域の死亡者もふえていったのではないかと考えられます。実際には、私もこの福井県側の地域の出作り地については

表一 永久出作り地での死亡者数

	1834～1853	1854～1872
○ 谷	6	3
○ 平 泉 寺	2	1
五 十 谷	3	11
○ 中 ノ 又	2	3
○ 暮 見	1	0
○ 小 池	2	0
三 谷	11	11
○ 打 波	5	6
刈 安	2	4
大 北	1	4
河 内 谷	37	6
○ 小 原	0	1
左 礫	0	2
二 口	0	1
苛 原	4	13
計	76	66
分 水 界 南	18	14

〔河内谷が極めて多い理由は天保8年の凶作によるものらしい。〕 ○は福井県側の集落



図一 林西寺過去帳に現われた永久出作り地の分布

まったく調査をしておりませんが、これまで得てきた資料からは、少なくとも福井県側の焼畑地域が手取川下流方面より古いのではなかろうか、しかもそれは江戸時代中ごろよりも以前からであろうとみられます。いうまでもなく、尾口村の古文書などには少なくとも慶長（1600年代）から焼畑があったことがわかっています。しかしそれが果して永久出作りによるものか、ジゲからの通い耕作あるいは季節出作りであったのか、その耕作技術はどの程度のものであったかなどは、この文書からはわかりません。

実はこの問題は、日本にも以前は東南アジアや中国南部の山間にみられるような、水田稲作にたよらず、焼畑耕作によって山中を移住してゆく住民があったかどうかという大きな問題へのいとぐちが、このような研究から手がかりをつかめるかもしれないのです。また、さきほど地理学の常識的説明に疑問が出

されたように、白峰の住民たちは金沢方面とはあまり交通せず、通婚でも交易でも分水界をこえた福井県側との交流が密接だったのですが、これも従来は分水界の地形がゆるやかだからとか、福井の方が地理的に近いなどといった常識的な解説をしていました。しかしながら、実は数百年間もつづいた白峰附近の住民と福井県側のムラムラとの血縁的・地縁的な結びつきの強さが、手取川下流よりも強かった、それは祖先が福井県方面からやって来たからであるという推論も成りたつように思います。自然保護センターは石川県が経営しているのですが、上に述べたような問題については明治以後にできた県境などにはこだわらず、日本全体にかかわる学問上のひろい課題として解決への協力が望まれます。なお、私の調査に協力を惜しまれなかった千葉県松戸南高校の山口昭博教諭に謝意を表します。

(明治大学文学部)



中宮のハシボソガラス

こんな発見、あんな記録1

中宮にツキノワガラス出現

中村 正博

今年の2月頃より、吉野谷村字中宮地内に喉の白いカラスが出没し、黒い体と白い喉からツキノワグマならぬ、ツキノワガラスとして地元で話題になった。初めは、畑の肥料にと捨てる生ゴミを時々あさりにくる程度で、人目をさけていたそうだが、4月頃より繁殖のためペアを組み、人前に出てくることも多くなった。5月にセンター水野研究普及課長が、写真撮影に成功し、ハシボソガラスの部分白化個体（アルビノ）であることが確認できた。

カラス（ハシボソガラス、ハシブトガラス）の、県内での白化記録は、昭和55年6月に田鶴浜町大津地内で、中宮個体とよく似た、喉から後頸にかけて白いハシボソガラスが、時国公政氏によって観察撮影されている。そのほか、8年位前に高松町で中川富男氏が、両翼の初列風切の2枚が白いハシボソガラスを観察しているし、著者も、56年10月河北潟で、両翼の初列風切の基部が白いハシボソガラスを観察している。これ以外の記録は不明であるが、いずれも部分白化で、完全白化の

記録はない。全国的には、完全白化のハシボソガラスの報告が数例あるが、部分白化についてはよくわかっていない。

白化は、突然変異によって発生し遺伝することが知られている。完全白化個体は、メラニンを生成する酵素であるチロシナーゼの欠如などが原因で生ずる。遺伝的に病的なものと考えられており、一般的には、視力が弱く、生存、繁殖能力も低いとされている。一方、部分白化個体は、チロシナーゼの欠如によるものではなく、この酵素の作用が著しく抑制されるために生ずるもので、肉体的には健全とされている。

白化以外の色変りとしては、淡色化や、黄化、褐色化、黒化などがあり、55年11月に、片野鴨池で、淡色化の一種である、シナモン化したマガンが、矢田新平氏により観察撮影されている。

ともあれ、中宮のツキノワガラスが、どんな「七ツの子」を連れてくるか楽しみである。
(庶務課)



田鶴浜のハシボソガラス（撮影：時国公政）



シナモン化したマガン（撮影：安田伸一）

〈山に生きる6〉

ヒノキ笠を 造って60年

—南 富士雄さん—



農作業や山仕事の際に、現在でも雨よけ・日よけ用に重宝されているのが、江戸時代以来の伝統をもつ“深瀬のヒノキ笠”です。南富士雄さん（71才）は、生まれ育った尾口村深瀬で近年までヒノキ笠を造り続け、ダム建設により深瀬が水没してからは、鶴来町深瀬新町に移り住んで、同地においてもヒノキ笠製造を行なっています。今回は、数少ないヒノキ笠製造技術保持者である南さんに語ってもらいました。

口伝によると、江戸時代に深瀬を訪れた旅の僧により製法を伝えられたのが、ヒノキ笠造りの始まりとされています。ヒノキ笠の製造を簡単に記すと、ヒノキの薄板（3分厚、長さ2～3尺）を縦にし、カンナがけをして厚さ1mm程度の極薄の細長い木片（ヒナと呼ばれる）を作り、これを編んで笠を造ります。ヒノキ笠の大きさはかつては7種類、大笠（235^{*}）、大中（215）、中上（185）、小中（175）、小上（165）、白山（155）、新型（130）がありました。南さんが現在製造しているのは小上・白山・新型の3種のみです。笠の種類が減ったことは、生産量の低下を意味しており、昭和初期に年間10万枚以上の生産量があったのに現在では2万枚くらいに落ちています。

この原因としては、ヒノキ笠自体の需要が減少したことの他に、ダム建設に伴う深瀬部落の移転、分散が考えられます。昭和49～50年にかけて深瀬の人たちの大部分が、金沢市や鶴来町に転出し、少数の人だけが代替地に

残りました。これにより昭和6年に設立された深瀬桧笠販売購買組合は40年余りの歴史の幕を閉じ、ヒノキ笠の生産・販売体制は四分五裂してしまいました。そうした中で、鶴来町に移転した南さんは、先の組合の職員だった関係から移転先でのヒノキ笠生産に関する世話人を頼まれ、材料の購入から生産の指導まで携っています。現在、鶴来町在住の深瀬出身者10人がヒノキ笠造りを行なっています。ヒノキを使った製品は笠だけにとどまらず、ランプシェード、盆、各種容器、網代（木盆敷・天井敷）などが副産物として造られています。特に、複雑な幾何学模様を編んだ網代の天井敷は南さん独自の製品で、自宅の天井も美しい網代で覆っています。この網代は、かつて昭和44年にJETROを通じて外国に紹介され、外国から南さん宛に商談がありました。結局、企業化するほどには網代を生産できなかったために外国に輸出することはできませんでした。南さんにとっては、金銭的なことよりも、美しい日本の木工製品を海外へ紹介できなかったことが、今となっては心残りだそうです。

笠を始めとするヒノキ製品は、木材独特の落ち着きと安らぎを見る者に与え、プラスチックや金属製品にはない木の香りがします。ヒノキ笠は、日本の木の文化・山の文化の一産物とも考えられますが、製造技術保持者がいずれも高齢者で、近いうちに技術が途絶するおそれがあることが、南さんの悩みの種となっています。

※笠の直径で、2尺3寸5分。以下同じ。（岩田憲二）

◇ 図 書 紹 介 ◇

伊沢紘生著「ニホンザルの生態—豪雪の白山に野生を問う」

白山はニホンザル生息地の中でも最も雪の多いところとして知られています。アフリカでチンパンジー、南米でオマキザル類、また下北半島のニホンザルなどを研究してきた著者は、約10年間、厳冬期にこの雪の白山へ入り、長い時には1か月以上、人の通わない中宮温泉の白山自然保護センターを基地にしてサルの観察を続けてきました。本書は、厳しい自然と気まぐれなサルの動きを粘り強く追い続けた記録です。

ニホンザルの社会学的研究は、餌付けと個体識別によって目ざましい進展をし、そのおかげで、わが国の動物の中でこれほど多くの本になったものではないでしょう。しかし一方で純粋な野生のサルを基礎にしたものはほとんどありませんでした。著者は広い自然の

中を遊動しているサルの群れには、これまで強く主張されてきたリーダー制や同心円構造、順位制は見られず、また群れと群れの間には闘わずしてそれぞれの採食の場を確保する関係があるといっています。サルにとって冬はどんなにか厳しいことかと想像しますが、雪崩跡地での採食等、彼らなりのすばらしい適応によって、たくましく生きていることを訴えています。

サルの社会学者の間では議論をかもし出していますが、サルの群れといえばボスという一面的な見かたから離れて、自然の中でサルの真の生きざまは何かを考える、画期的な提言をした書といえます。

〈四六判 418頁 どうぶつ社 1982年 1800円〉

松山利夫著「木の実—ものと人間の文化史47」

かつて白山麓の白峰村や尾口村の一部では、毎年秋にトチ拾いが行なわれ、トチモチが各家庭で作られていました。このような木の実利用の実態を国内外各地において調査し、文化論的考察を行なったのが本書です。著者はこの中で、トチやドングリといった堅果類の採集、加工技術、加工製品等について言及し、更にそれら木の実食品を軸にムラの生活を詳細に紹介しています。

白山自然保護センターに、かつて3年ほど在籍し、現在国立民族学博物館で調査研究に携わっている著者は、自身の専門分野である民俗・民族学的アプローチのみならず植物生態学や考古学といった立場からと木の実を考察しています。このことが、本書の内容をよ

り幅広く興味深いものになっています。また、食品成分分析、花粉分析、簡易トラップ採集といった実証的・科学的データを用いた説明がなされている点も特徴的です。

以上の考察・手法を踏まえた上で、著者は日本の「木の実文化」の仮説を立てています。木の実食に不可欠なアク抜き技術を水さらし法と加熱処理法に分類し、前者が西南日本から韓国・中国西南部へ、後者が東北日本から東北アジアへ展開することを推論しています。日本文化の源流を知る上で、木の実の一つの指標となることをこの本は教えています。

〈四六判, 371頁, 法政大学出版局, 1982年 2000円〉

たより

自然環境に恵まれた白山地域では、様々な動植物が生息し、また、訪れる者の眼を楽しませてくれます。こうした自然は本来なら、そのままそっとしておくべきでしょうが、生息条件がそこなわれない程度なら、我々人間も少しは楽しみたいものです。今回は、そうした「自然の楽しみ」ということをテーマにいくつか掲載してみました。自然の楽しみ方は、人により異なると思いますが、要は肩肘張らないで気軽に、ありのままの動植物や大地の姿を観ることが大切です。特に小中学生の皆さんは、何か一つテーマを見つけて、夏休み中に自然観察を楽しんだらいかがでしょうか。

さて、待望の白山自然保護センターの新庁舎が完成し、私達職員は既に6月1日から同庁舎で勤務しています。前号(10巻4号)の表紙で紹介したこれまでの冬期事務所は5月末で閉鎖となり、資料・書類等はすべて新庁舎に運び終わりました。新庁舎は、冬期事務所があった吉野谷村字市原の隣りの回村字木滑に建設されました。なお、中宮温泉近くにある夏期事務所は、中宮展示館と名称を改め、普及教化活動専門の施設となりました。同展示館には職員が常駐し、来館者のお世話をします。

2年ごとに中宮展示館で開催されてきたテーマ展が、今年も行なわれます。7月23日(土)にオープンの予定で、県鳥“イヌワシ”をテーマにした展示が開かれます。これまであまり明らかにされてなかったイヌワシの生態を、写真・剥製・模型等により、わかりやすく解説する予定です。

(岩田)

目 次

表紙 プナ林と集落	岩田 憲二	1
自然保護雑感	岩田 憲二	2
プナ林の自然観察～春から初夏にかけて～	上馬 康生	4
自然解説員の活動	美馬 秀夫	6
冬眠グマ調査行	野崎 英吉	8
いわゆる「出作り耕作」への疑問	千葉 徳爾	10
図書紹介「ニホンザルの生態」、「木の実」		13
こんな発見・あんな記録1		
中宮にツキノワガラス出現	中村 正博	14
<山に生きる6>ヒノキ笠を造って60年—南富士雄さん—	岩田 憲二	15
たより		16

はくさん 第11巻 第1号(通巻47号)

発行日 1983年6月30日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
☎920-23 TEL 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本確文堂